

東京電機大学高等学校卒業式式辞

本日、ここに東京電機大学高等学校第六十六回卒業証書授与式を挙げていただきますことを、心から感謝申し上げます。ただいま、卒業生 254 名に対して卒業証書を手渡すことができました。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。今日まで皆さんが積み重ねてきた努力を心から讃えると同時に、卒業の喜びとその栄誉は、皆さんのことを支えて下さったご家族はじめ、多くの方々のお励みがあったからということも忘れずに、感謝の念を皆さん自身の言葉で表して欲しいと思います。

皆さんにとって、本校での三年間の生活はどのように記憶されるでしょうか。楽しかったこと、嬉しかったことばかりでなく、辛く、悔しく、悲しかったことも含めて、後々、充実した青春の日々であったと思いついてもらいたいと願っています。そのためには苦楽を共にした友の存在が不可欠でしょう。今日一緒に巣立つ 254 名の仲間が皆さん一人一人とつながっています。高校時代の出合いを大切にされ、これからの人生を歩んでいっていただきたいと思います。

さて、折しも今日は東日本大震災から六年となります。本日もご列席の方々の中には、もしかしたら直接被災し身近な方を亡くされた方もいらっしゃるのではないかと思います。改めてお見舞い申し上げますとともに、地震が発生した午後 2 時 46 分には、震災で犠牲になられたすべての方々に対する弔意を表したいと思います。

六年前と言えば、皆さんは小学校を卒業する直前でした。東京近辺に住んでいた方が大部分でしょうから、地震や津波による直接的な被害を受けたという感覚はないかもしれませんが、しかし、そういう私たちも生まれて初めて経験するような大きな揺れに驚き恐怖を感じました。交通機関が麻痺して、都心で働く多くの人々は帰宅の足を奪われ、会社に泊まったり何時間もかけて歩いて帰ったりしました。本校でも百人以上の生徒と教職員が校内に泊まって不安な一夜を過ごしました。

それだけではありません。地震と津波に加えて、福島第一原子力発電所の想定外と言われた甚大な事故は、被災地のみならず日本全体そして世界にも影響を及ぼしました。計画停電の中、刻々と悪化する原子炉の状況を伝えるテレビニュースを見ながら過ごした数日間を忘れることはできません。困難な廃炉作業はこれから数十年間続くと予想されています。

どんなに文明が発達しても自然界の持つ圧倒的なエネルギーの前では人間は無力でもろい存在であること、科学技術の進歩をもってしても、地震や津波を抑えることはできないこと、人間が造ったものに絶対に安全・安心はあり得ないこと。そして、日本いや世界の中でも最も快適な都市生活が約束されていると思っていた東京ですら、遠く離れた電源地

帯からの送電がストップし、日本全国を結ぶ物流が途絶してしまえば、衣食住の基本さえも不自由を余儀なくされてしまうこと。大震災はこうしたことに改めて気づかせてくれたように思います。

このことは現代社会の持つ本質的な問題を浮き彫りにしていると思います。近代以前の社会においては自給自足という言葉に象徴されるように、衣食住の根幹は自分たちの身の回りにあるもので調達されており、それによって最低限度の生活レベルは確保されていましたから、ある意味、自然災害に対してもしなやかに対応することが可能であったと言えます。一方、私たちの生きる現代は、交通機関や情報通信網の高度な発達により人もモノも情報も世界的規模で緊密に結びついています。ですから、ひとたび大きな災害が起これば、その影響は被災地のみならず想定を超える広範な地域に及んでしまうのです。今回の大震災においても、東北の工場が被災して部品の調達が困難になったため、九州の工場での生産がストップしたという事例がありました。

このように、現代を生きる私たちは、自分たちが思っている以上に相互補完的な関係性（お互い同士が補い合って完全にする）の中で生きているのです。その関係性は国内に限定されません。国際的な分業体制の確立した世界経済においては、世界中の国々が何らかの形で相互にモノやサービスを交換して経済を回しているのです。もはや自給自足体制を維持できる国はないと言っても過言ではありません。

私たちは六年前の震災を経験して、人間存在の小ささ、無力さ、弱さを心底実感しました。人間は一人では生きていけない。お互いに支え合ってこの社会は維持されている。それを震災直後という困難な局面において、私たちは「絆」という言葉で表現していたのではないのでしょうか。支え合うとは文字通り支え支えられ、ということです。自分が弱い立場の時は遠慮なく周りの人に助けをもらっていいのです。その代わり、あなたの周りに弱い立場の人がいたら、見返りなど考えずに必要な援助をさしのべるのが、あなたが誰かに助けをもらったことへのお返しなのです。相互補完的な関係性とはそういう意味です。多様な価値観の相互承認と寛容の精神を前提とする民主主義の理念も、こうした関係性をふまえて長い時間をかけて形成されてきたものと思います。

しかしながら、私には現実の世界はそれとは逆の方向に向かっていくように感じられてなりません。それは昨今メディアや言論界にしばしば登場する「分断」という言葉からもうかがえます。経済成長が滞り地域や国家、世代間の格差が拡大した結果、世界各地で国家や社会への不満と怒りが高まっています。そうした中、善と悪、敵と味方というように安易に社会を「分断」することで、複雑な背景を持つさまざまな問題を単純化して対処しようという風潮が広がっているように思うのです。しかし、そうした二分法的、二項対立的な世界観は、多様性を尊ぶ民主主義とは相容れない考え方です。そして貴い犠牲を払って東日本大震災から学んだ相互補完的な関係性に基づく社会、共同体のあり方をも否定してしまいかねない危険性をはらんでいます。

今、日本や世界は大きな転換期にあります。先を見通すことが困難な厳しい時代を皆さんは生きていかななくてはならない。十七世紀にパスカルが言ったように、人間はか細く弱い一本の葦のような存在です。だから、人々はお互いの足りない部分を補い合い支え合って生きていかなければならない。物事を単純に考えることはたやすいことです。でも現実の世界は複雑です。人同士が助け合い支え合って生きていくためには、時間がかかっても互いの利害を調整し何とか折り合いをつけて、現実をより増しなものにしていくしかないのです。

楽観的な未来像を描きにくい現実ですが、だからと言って悲観して最初からスタートラインに立つことさえ諦めてしまうことはあってはならない。それでは支え合う相互補完的關係性を維持できなくなってしまう。皆さんにはいかなる困難な状況に遭遇しても、受け身ではなく主体的に受けて立つ気概を持って立ち向かっていって欲しいと願っています。

保護者の皆さまには、本日まで、学校の教育活動に深いご理解とご協力をいただきまして、心より感謝申し上げます。また最後になりましたが、学園、PTA、校友会、同窓会をはじめとするご来賓の皆さまには、お忙しい中をご臨席下さいまして誠にありがとうございました。感謝申し上げます。

それでは、卒業生の皆さんの前途が輝かしいものになることを心から期待して、式辞とさせていただきます。卒業おめでとう。

平成 29 年 3 月 11 日

東京電機大学高等学校
校長 大久保 靖